



**質問** 雪崩と書いてなぜ「なだれ」と読むのですか

**回答**

「なだれ」という日本語は古代からあり、「くずれる」とか「流れくだる」という意味を表す言葉でした。雪がくずれる意味で使った「なだれ」も1076年には、澄覚法師の連歌にひらがなで表れています。このあと室町時代になって漢字を本文とする辞書が作られるようになって、雪がくずれる意味での「なだれ」に「雪頽」の漢字が当てられました。「頽」にはくずれるという意味がありますから、雪のくずれで「雪頽」としたのでしょう。こうして「なだれ」現象に「雪頽」の漢字を当て、その訓読みをもともの日本語の「なだれ」とするようになったと考えられます。

このように漢字2文字以上をまとめて訓読みすることを、熟字訓と呼んでいます。「熟字」とは「熟語」と同じ意味で、熟字訓とは、熟語の訓読みという意味です。例えば、「泡沫」と書いて「うたかた」と読むことがあります。これも古代日本語の「うたかた」に「あわ」の意味を持つ漢字2文字「泡沫」を当てたものと言われています。「土産」を「みやげ」と訓読みするのも熟字訓です。

この「雪頽」は漢字の順番を「頽雪」と変えながらもしぶとく生き残り、大正末くらいまでは、新聞記事などに載っていました(熟字で動詞を表す漢字を先頭に持ってくるのは、漢文のレ点読みの影響なのかもしれません; 下記の「雪崩」と

雪氷学にかかわる疑問や技術的な問題など、広く会員の方々の質問に答えるコーナーです。雪氷編集委員会あてに、文書で質問をお寄せ下さい。

「崩雪」も同様です)。

では、質問の「雪崩」はどうかと言いますと、江戸時代の半ばには文献に「山上の雪崩れ落る事あり」のように「雪」と「崩<sup>ユキクス</sup>」の文字の結合が見られはじめました。この2文字の結合—熟字も意味的には「なだれ」現象を示すのですから、「雪崩」を熟字訓で「なだれ」と読む用法が出てきてもおかしくありません。実際「頽」よりは「崩」の方が、「くずれる」という意味合いでは直裁的で、いかにも「なだれ」らしい感じがします。明治時代になるとこの「雪崩」の熟字が新聞などに使われるようになり、2文字の順番を変えた「崩雪」とともに使われ、昭和年代に入ると「雪頽」に取って代わるようになりました(「崩雪」の使用は昭和10年代までに限られます)。その後、戦後の当用漢字制定の際、「頽」は入らず「崩」の方が採用されたため「なだれ」の漢字表記は完全に「雪崩」だけになりました。

こうした歴史的変遷を経て、「雪崩」を「なだれ」と呼んでいるのです。簡単に言えば、「なだれ」という古代からの日本語に、同じ意味を表す漢字「雪崩」を当て、熟字訓で「なだれ」と呼ぶようになったのです。

## 文 献

和泉 薫, 錦 仁, 2002: 日本における“なだれ”現象の認識とそれを表す言葉の変遷. 雪氷, 64, 461-467.  
(新潟大学災害復興科学センター 和泉 薫)  
(2008年11月25日受付)